

形

forme

「特集」
四つの力



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

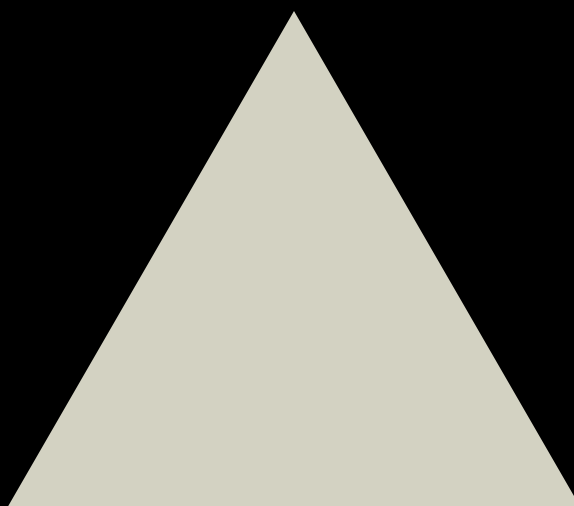
日文

検索

开 + 多

Nr.04

かたちについて、ここで、あらためて。





眼

それは レンズ

まばたき

それは わたしの シャッター

髪でかこまれた

小さな 小さな 暗室もあって

だから わたし

カメラなんかぶらさげない

(茨木のり子 『私のカメラ』第一〜第四連)



こころの なかの 美術館

授業レポート

「みんな覚えてるかな？ 図画工作で使う四つの力！」市川安紀先生の授業はこの一言で始まります。山梨県で開発した「四つの力」と呼ばれるカードを授業の最初に掲示して、活動の中で働かせる力を子どもたちと共有する工夫を取り入れていくのです。「一つ目は？」と聞くとすかさず「思いをもって楽しもう！」。六年三組の子どもたちの声が元氣よく返ってきます。後は先生が聞く前から「思いに合わせて考えよう！」「思いに合わせて工夫しよう！」「見つめよう！」と続きます。

黒板や教室の後ろには、ゴッホやカンディンスキーなどの作品の鑑賞画が並んでいます。作家作品を鑑賞して、自分が感じたことを絵に表す「心の中の美術館」の活動です。

「今日は四つの力のうち、特にどれを使うかな？」と先生が黒板に掲示した四つの力を指しながら確認します。「見つめよう」との返事に「画家の作品だけじゃなくて、自分の心の中を見つめるのが大



切だよ」と先生が付け加えます。カードにも書いてある「思いに合わせて」を意識させる一言です。「今回は鑑賞した後の気持ちを言葉にしたね。キラキラとかざわざわとか。鑑賞した自分の心の中はどんな形や色かな。それを表してみよう」。

用具は筆と絵の具を使います。風景のようにかいたり、線や点などの形でかいたり、表し方や絵の雰囲気さまざまなのは、それぞれが自分の思いに合わせて表しているからでしょう。市川先生は一人ひとりに「どんな思いを表したの？」と声をかけます。思いに合わせて考えたことや工夫したことを引き出そうという姿勢が伝わってきます。ある子どもが画用紙の端に三角形の切り込みを入れたのを見つけると、先生は「ちょっと切ったんだ。工夫したね」と、考えて工夫する過程を見逃さず声をかけます。迷っている子どももいます。けれど、最初に確認した四つの力の言葉に戻り「もう少し見つめてみる」と言ってまた自分で考え始めました。自分の思いを見つめて、形や色を探る子どもの姿が見られました。

最後は全員で鑑賞です。ある作品について「明るいところと暗いところがあり分かれている」との感想が出たのを受けて、市川先生は「実は『さみしい気持ちと明るい気持ち』というタイトルです。自分の気持ちを自分の形と色で表せているね」とまとめました。四つの力を発揮しながら取り組んで、自分や友だちの今までは見えなかった気持ちに、形や色を通して出会えたことでしょう。

特集

四つの力

授業をよりよくしたい。

そのために山梨県の先生方が考えたのは

図画工作・美術で育てる「四つの力」を

学年に合わせて子どもが覚えられる言葉にして

授業で掲げるシンプルな工夫。

この工夫を取り入れた市川安紀先生の授業を振り返りながら、

仕掛け人の鷹野晃先生、図画工作・美術の

学びを発信してきた奥村高明先生を交え、話し合っていたいただいた。

	造形への 関心・意欲・態度	発想や 構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
第1・2 学年	たのしく やろう!	かんがえよう!	いろいろ やってみよう!	たのしく みよう!
第3・4 学年	進んで やろう!	いろいろ 考えよう!	ためそう! 工夫しよう!	見つけよう!
第5・6 学年	思いをもって 楽しもう!	思いに合わせて 考えよう!	思いに合わせて 工夫しよう!	見つめよう!



奥村高明

おくむら・たかあき

聖徳大学児童学部学部長、教授、博士（芸術学）。小中学校教諭、美術館学芸員を経て文部科学省教科調査官。学習指導要領作成や評価規準づくりに携わった後、現職。近著に「美術館活用術」（美術出版社）、「子どもの絵の見方」（東洋館）等。

市川安紀

いちかわ・あき

山梨市立加納岩小学校教諭。中学生の時に交換留学で訪れた、フランスのルーヴル美術館に感動し、大学ではフランス語、美術史を専攻。書店に務めた後、ワクワクを求めて教員を志す。二〇一三年度より現職。現在、六年生を担当。

鷹野晃

たかの・あきら

北杜市立明野中学校教頭。山梨県内の中学校美術教諭、山梨県教育委員会図画工作・美術担当指導主事を経て現職。学習指導要領解説図画工作編作成協力者。本年十月三十一・三十一日開催の全国・関東ブロック造形教育研究山梨大会研究局長。

「四つの力」 図画工作・美術で育てる

奥村 山梨県では、図画工作・美術の資質や能力を、子どもに分かる言葉にして、授業の最初に示すという取り組みをされています。今日はこの工夫を取り入れた、市川先生の授業を拝見しました。

鷹野 市川先生は二年目だから、新採用研修が終わったところですね。去年は図画工作の授業はもっていたのですか？

市川 もっていました。図画工作について学ぶ機会は、研修が夏に一回あったくらいです。去年五年生を担当して、今年はもちあがって六年生の担任です。

鷹野 そのような状況で、若い先生は図画工作の授業をどうつくっていたのですか？何を頼りにしているのかな？

市川 一年目は何をしたらよいか本当に分からなくて。学年の先生から何をやるのかは聞きますが、実際子どもにどういう声かけをしたらよいか、子どものやる気をどのように引き出したらよいかは分からないまま一年が過ぎてしまったという感じです。子どもが迷っている時に、どうすればよいか、教える側の私も分かっているないのでゴールが見えない。「こういう工夫もあるよね」などと言っていました。それがその子どもにとってよいのかは分かりませんでした。

奥村 教科書や同僚の先生方がとりあえずの手がかりだけど、さてどうやって進めるかは分からないまま一年が過ぎてしまった。そして今年から「四つの力」の工夫を取り入れたということですね。まずはこの工夫がどんなものか、教えてく

ださい。

鷹野 山梨県の先生方で、図画工作・美術で育てる資質や能力である「造形への関心・意欲・態度」「発想や構想の能力」「創造的な技能」「鑑賞の能力」の四つを子どもたちにも分かる言葉にして、カードにしました。「図画工作・美術で働かせる『四つの力』」と呼んでいます。これを授業の最初に黒板に掲げること、子どもたちと共有しようという考えです。

奥村 取り組みのきっかけは何でしょうか？

鷹野 県で評価規準づくりに取り組んだ時、「より積極的」や「より意欲的に」など、言葉のニュアンスの世界にいつの間にか入り込んでしまつて。反対に、もっと大きな視点に立つて図画工作・美術の学びを一言で言ったらどうなるかを考えてみたくなつたんです。そうすれば「図画工作・美術は楽しいんだけど、いったいどんな力を育てているの？」という教科に向けられた疑問の答えにもなるのではと考えました。そして専門用語でなく、子どもにも分かるようにと、県の研究指定校の先生方とともに、この「四つの力」



のカードに書かれた言葉にたどりつきました。

市川 実際に子どもたちはよく覚えていて、とても言いたがります。

鷹野 その姿がよいよね。黒板に貼ろうとすると先に言っちゃう。

奥村 大人に寄せて考えると《思いに合わせて考えよう》というのは、思考・判断や論理、《工夫しよう》は技法や技術開発などと言えますね。先生と子どもをつなぎつつ、図画工作で育てる力は何かということを評価の観点から研究してもらっていたんですね。

鷹野 国の授業改善の調査書みたいなものはあるけど、小学校の先生はとも全教科分をきっちりとは見られない。そこでまずはこれを貼りましょうと。

奥村 授業改善のツールということですね。市川先生が使ってみての具体的な変化をお聞かせいただけます。

市川 声かけのきっかけになりました。「どんな思いでやってみたの」や「どんな工夫をしたの」など、カードにある言

四つの力

葉を使って声かけをしたらよいのかなと、なんとなく分かってきたような。子どもたちもどうしたらよいのか分からなかったのが、貼ってあるカードを見て、考えたり工夫したり、見つめたりしたらよいんだという気持ちに変わったところがあるのではないかなと思います。

奥村 混乱している時のよりどころになるということですね。

鷹野 言葉かけが具体的に変わってきたのかな。指導の方法とか焦点化とか、技法の提示とか。

市川 去年一番嫌だったのが、「先生これでよいですか」と言われることでした。自分が思ったことが表せたから完成、と言ってほしいという思いが私にはあるんですが、多くの子どもが私のところに確認しに来るんです。どう思うのか聞くんですけど、「うーんとなってしまっって。」「こ

こをかき足したら」などとアドバイスをするんですけど、それがすごく嫌でした。それが今は減ってきています。

鷹野 中学でも同じ取り組みをしています。過程に意識がいくようになりました。こんな工夫をしたんだとか、失敗したことも足跡として大切だと気付いて、こんなに苦労したんだとか言うようになりました。子どもが確かに変わるんです。

奥村 今回の授業のワークシートは「工夫したところ」を書くようになっていましてね。四つのうちの一つということですが、工夫するとしたら？

市川 そうですね。四つの中から選ぶようにしたら、自分が特に大切にしたいことを振り返られてよいですね。

鷹野 別の先生の授業でやっていたのは、つくっている途中の作品を、自分が頑張ったカード、例えば《いろいろな考え



よう！》の隣に置いて写真を撮るんです。それで「自分は考えた」という過程を残す。働かせた資質や能力を自分で意識して、自分で学習している姿ですね。

市川 子どももちゃんと自分で考えているんですね。



この日の活動で子どもたちがかけた作品



教育の「資源」をチェックする

奥村 この四つから教育の「資源」がチェックできそうですね。

市川 資源ですか？

奥村 「資源」は私の独特の使い方です。材料、用具、机、人など学習に関わる教育的なすべての資源という意味です。例えば、紙の大きさ、絵の具と筆、技法など、そういうことを四つの視点でチェックできる。

そう思った理由はこの子の作品を見てなんですが、たぶん虹をかこうとして、失敗したのかな。虹のかき方は結構難しい。例えば、紙に絵の具を直接のせて、定規でぐいとやるやり方がある。

鷹野 あっ、ワイパーみたいに。

奥村 どの程度こちらで技法を用意しておくかというチェックになりますよね。

この子は筆の使い方追求している。一枚目、二枚目、三枚目で筆の使い方が変化している。てんてんとやったり、これはひたすらくるくると。すると紙の大きさは半分くらいでよかったかもしれない。

市川 いくつか大きさを用意しておいて選ばせた方が、その子に合った活動ができたのではないかといいことですね。

鷹野 単純に小さくすると、いろいろ試したり工夫したりしやすいでしょうし。

奥村 そういうチェックに、四つの力のカードが使えるなど思いました。

うまい／へたという呪縛を解く

奥村 この子は自分の工夫をしつかり書



右上の部分は虹をかこうとしたのだろうか。題名は「はっぴー」



てん、てん、てん。確かにこの子は筆を立て、穂先を使うという工夫をしていた

いていますね。「くるくるをたくさん書いて、乾いたところに上からまたくるくるをかいた」「小さい点々をかく時に、筆をとんとんとして」とか。

市川 もともとこの子は、図画工作に対して苦手意識を持っているんです。いろいろ工夫して先生はすごくすてきたと思うと言っても、自分はへただ、と言ったことがあります。

奥村 メタ認知がちょっと進んでいるんですね。

鷹野 でも市川先生が「思いに合ったものを探せばよいよ」と言葉かけをしたことで、うまい／へたではないステージで勝負できるということをこの子は見つけられたのではないかと思います。工夫すればよいんだ、思いをもって楽しめばよいんだというようにね。

市川 それはすごく感じます。カードを使い始めてから、子どもたちは失敗したとは言っても、うまい／へたという言葉あまり使わなくなったように思います。こんなことができたとか、くるくるしたのが面白かったとか、そういう感想が多くなってきています。

鷹野 そこです。うまい／へたという、子どもたちの呪縛を解く意味でこの四つの力があります。学習指導要領の願いが子どもたちに届いていく切符でもあるんですね。事実、こういう子がいるわけだ。

奥村 そういう効果があるのかあ。図画工作科のフレームワークを問い直す働きがあるかもしれない。

準備の話をしました。例えば先生が授業の準備で教科書を見る時も、教科書

の作品をこの視点で見られるかもしれない。「こんなうまくかかせられない」と言うのではなく、「この子はくるくるを楽しんでいる」という視点で見られる。

鷹野 先生の方が実はターゲッでもあって。教材を探す時、子どもたちの考えを深めるものか、工夫を引き出すものかという視点になる、そこを目指したいね。

奥村 影のねらいですね。

鷹野 先生の好き嫌いも語られなくなりました。保護者からの「先生の好みで評価していますよね」という声を聞いたことがあります。もし作品の出来映えに評価の力点が置かれるとそういう不安が生まれますが、カードを使うことで、過程や活動の最中に起こることに教師も保護者も目がいくようになったかなと。

奥村 子どもの姿が評価の根拠になりましたね。キャリアが長い先生と二年目の先生とでは、視点がいつのまにか離れてしまいます。そうすると説教になる。これが正しいやり方なんだと。それをぐっと縮めてくれるような気がしますね。

評価規準というベースがあってできたカードですが、授業改善や子どもと先生とのつながりなど、いろいろな効果がありますね。

新しい自分と出会う教科

奥村 何も分からないスタートと仰ってましたが、今はどんなことが楽しいですか？

市川 一人ひとりの個性がすごく際立つ



点でかいたり線でかいたり、1枚の絵の中でいろいろな工夫がされている

のが面白いですね。今回の題材で言えば、例えばこの子はすごく明るくて、いつもにこにこしている子なんです。だれでも仲よく楽しそうにしている。でも、どんな気持ちをかいたのか聞いたら、暗い気持ちをかいて、もやもや、ぐちゃぐちゃしたのが明るい心とぶつかっていると答えました。暗い何かが心の奥にあるんだと気付きました。（九ページ上から二つ目の作品）

奥村 子どもにとっても個性が出るし、先生にとってもその子のことが新たに分かるということですね。そうか、絵を通して成長が分かるんだ！赤い部分が下だと普通ですよ、赤い海みたいで。

市川 そうですね、最初はここは地面みたいにすると言っていました。

奥村 なんでひっくり返したのかな？

市川 題名をつける時に自分がこうだと思うところを探して、回したり切ったりしてもよいんだよと話したら、この子は逆の方が合っていたようですね。

鷹野 確かに不安定な感じがするね。

市川 真ん中を一番かきこんだんですけど、それを同じ班の子が、ここからすぐくどろどろした感じが伝わってくると言ったんです。本人は恥ずかしいけれど、見つけてくれてうれしいって。

鷹野 先に鑑賞をして、心の中を表せるんだという感激を感じたのかな。この題材で作品に出会って、新しい自分が出てきたということだね。そんな学習ができた。そう思うと題材って大事。

市川 作品をいろいろ見ることができると、自分の思いに変換する。やりたいと思うことをどんどんやっている姿を見るのはすごく楽しいです。「先生、こうやったんだよ」とか。そういう子どもを見ていると、図画工作っていいなあ、と思います。楽しんで自分の考えを表すよさというか……。

奥村 子どもの新しいところに出会える教科ってなかなかないよ。

市川 これからも新しい発見をしていきたいです。

「設場の」

木版画編

文
名達英詔

北海道教育大学 旭川校 教授

イラスト
後藤恵

木版画で表す楽しみ

シュツシュツ、サクサク。彫刻刀の先から聞こえる音、版木の香りや手触りを感じながら体全体で彫り進む心地よさ、ローラーでインクをのせる気分、刷り紙をそつとめくって出来映えを確かめるわくわく感。木版画の活動は子どもの心をつかむ楽しみで溢れています。そうした楽しみを十分味わってもらうための場の設定について少し見ていきましょう。

「安心して夢中になれる」がポイント

彫刻刀やインクなど、木版画で表す活動には子どもが興味を示す、しかし、扱い方には配慮したい用具や材料が登場します。また、立ったり移動したりする作業も求められます。安全を確保しつつ楽しさを味わえるように、子どもも指導者も安心して夢中になれる場を設定したい

ものです。そこで、例えば次のような点をヒントにしてはいかがでしょうか。

①用具・材料・仲間を大切にできる場が高める協働の気分

彫刻刀やパレンなど、活動を支えてくれる用具や材料の居場所をつくったり、刷りの場面でインクが手に触れる子と触れない子でパートナーを組み、協力する場を設けたりすることで互いを大切にしながら協働する気分が高まります。

②ゆとりある場が導くスムーズな動き

版木を彫る子どもの背後に空間を設けたり、彫っている版木の周りを広くとったりすることで、安全な移動や版木を回して彫るといった動きが導かれます。

③場の役割が促す主体的な活動

インクをのせる場と刷り上げる場を分ける。机の上の用具も使い方が伝わるように配置する。作業毎に役割をはっきり

させた場を動線に留意しながら設けることで、作業の流れに対する子どもへの理解が促され、進んで活動する意欲が高まります。教室の広さや子ども数の人数によって複数設定してもよいでしょう。

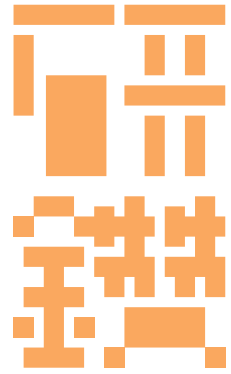
④視線が交差する場で生まれる見やすい視野と思いの重なり

彫るときに互いの手元が見えるように座ったり、刷り上がった作品を見合える場を設けたりすることで作業の様子が見えやすくなるとともに、子ども達や指導者の眼差し、思いの重なりが生まれます。

学びの気分を支える場の設定

場の設定は物理的な使い勝手だけでなく学びの気分にも大きく関わります。それぞれの実態に合わせて、子どもも指導者も夢中になって活動できる場づくりに楽しんでいきたいものです。





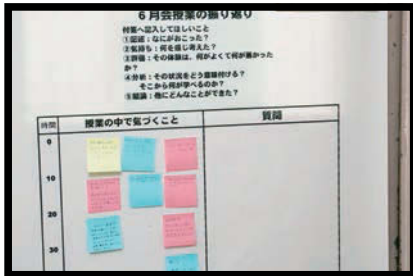
6月会 明日への美術教室



①の実践「ナンダワールド IN 菅生」



④の実践「ガムテープマテリアル」



参加者が感じたことを貼る。忌憚のない意見が並ぶ

美術教師の 本当の力量が問われる

神奈川県川崎市で、半世紀以上継続されている研究会「6月会」には、開始以来変わらない独自のスタイルがある。一つの中学校に他校の美術教師四名を集めて、一斉に公開授業を行うのだ。授業者は市内の四地区から一人ずつ選ばれ、普段と異なる環境、初めて接する生徒を相手に授業を行う。つまり、ねらいを明確にした題材と、それに沿った授業展開のみで生徒をひきつけなくてはならない。参加者が「教師の授業の本当の力量が問われる」とも語る理由はここにある。

提案たりうる研究授業を

五十四回目となる今年度の授業者は、

四名とも在職十年未満の先生方。最近はやつてみたい先生が「来年はぜひ自分もやってみたい」と手を挙げる人が多いとのことだ。

題材は、①カメラと合わせて、カラーセロハンやビーズなども用いて、見慣れた風景を変化させ撮影する、②針を使って羊毛をフェルト生地に通え込んで心の内面を表す、③視点を変えて風景を描く、④作家の関口光太郎の手法に刺激されて考えた、新聞紙とガムテープを使った、立体で動物をつくるという四つの提案がされた。どれもあまり見たことがないが、参加者も「一度きりの提案なので、日頃ではできない授業を」という気持ちで自然と反映されているようだ。

そして新しい提案だからこそ、授業後の協議会では、どのような力を育て、授

業を展開するのかという、授業の質が活発に議論される。例えば④の授業は、体育館のステージに段ボールの丘をつくり、そこに完成作品を展示した。これは題材の目新しさだけで終わらせず、空間とのかかわりを学ぶというねらいから生まれた展開ということだった。6月会での授業のエッセンスを日々の授業に生かそうと、全員で議論したからこそ、こうした工夫が生まれた理由などが共有されるのであり、充実した研鑽の場となっているのだと感じた。

初めて出会う生徒に、新しい題材でぶつかる。この厳しい条件があるからこそ、悩み、工夫するのであり、そこに研究の意義があるといえるのだろう。



授業を終えて

『ナンダワールド IN 菅生』
～「いつもの」じゃない「新世界」～
守屋美美先生（川崎市立富士見中学校）

三年前も6月会で写真の授業に挑戦したのですが、今回は地区の先生方の協力をえられるという6月会の環境もあって、一人一台のカメラを使えました。生徒はそれぞれのイメージに合わせた撮影ができたと思います。今回私にとっての一番の収穫は、「生徒が主体的に活動する場面」が実感できたことです。使う材料・用具を選んで撮影し、さらに写真を選び、イメージに近付けるために工夫する生徒の姿が見られたことで、そういう感触がもてました。



先ず見る 之凡目凡 第七回

生命には軸がある

高村光太郎にとって、《榮螺》は彫刻の本質を知る契機となった作品でした。榮螺を彫るのに何度も失敗していた光太郎は、あるとき本物をじっくり観察し、「貝の中に軸がある」のを発見します。「一本は前の方、一本は背中の方にあって、それが軸になつていて、持つて廻すと滑らかにぐるぐる廻る。貝が育つ時に、その軸が中心になつて針が一つ宛殖えて行くといふことが解つた」（『回想録』一九四五年）。この発見により光太郎は、自然の動きをよく見て飲みこめば、あらゆる生命に人間と同じ動勢を見出せることを知ります。

明治期によく見られた、自然のものをそっくりに作るような「置物彫刻」を、光太郎は彫刻ではないと否定していました。光太郎がかつて父・高村光雲に反発していたのは、光雲の制作態度が置物の時代を引きずっていたことと無関係ではありません。ところが、内側を貝特有の銀色に着色し、水滴を思わせる真珠を一粒埋めこむ細工をほどこした《榮螺》をはじめとする光太郎の木彫群は一見置物彫刻のようであり、生活の糧のため、かつて否定したものに歩みよつたと評されることがあります。実際、一九三〇年に《榮螺》が出品された木燿会木彫展は、高島屋大阪店美術部が木彫の鑑賞機会を提供するため高村光雲を顧問として企画したもので、これへの参加は、父への反発心が和らいでいたことを示しています。





しかし、その制作動機は「木彫に本来の自覚を持たうとした」ものだったと光太郎は述べています。彼の木彫は写実を徹底するのではなく、不要な要素は省き、刀痕による小さな面を連ねて大きな面を形成する、彫刻的な構造のなかで生命の原理を捉えなおしたものであったのです。光太郎には彫刻制作から離れていた時期がありましたが、一九二四年から木彫の頒布会を始めています。久しぶりに手がけた木彫の多くは、手で包みこむことができるとような小品がほとんどでした。《榮螺》や《鯰》の表面を形づくる無数の刀痕は、手の平で触覚を心地よく刺激します。それは何よりも光太郎に彫刻の喜びを思い出させる感覚でした。置物彫刻が床の間の芸術ならば、光太郎の木彫は、たなごころ掌の芸術であったといえるでしょう。

そんな木彫の制作は一九三一年を最後に途絶えます。この頃、妻・智恵子が精神に変調をきたし、危険な小刀やノミを近くに置いておけなくなつたためです。智恵子が縫つたという《榮螺》を収める袋には、光太郎直筆の短歌が書かれています。

いはほなす ささえの貝の かたき戸の
うこくけはひの ほのかなるかも

わずか七年の間に高村光太郎がのこした木彫群は、ささやかなものであっても、その生涯のなかでひとときわ輝いています。

迫内祐司 さこうち・ゆうじ
一九八一年福岡県北九州市生まれ。小杉放菴記念日光美術館学芸員。主な企画展に「中村直人 彫刻の時代」(二〇一二)など。共著に『近代日本彫刻集成(全三巻)』『美術の日本近現代史』がある。

授業実践

学びのフロンティア

小学校3・4年向き

ビー玉コースター ～みんなでつないで～

試しながらつくり、つくりかえる「工作に表す活動」

大阪教育大学附属天王寺小学校 狩谷潤也

はじめに

ビー玉を転がして遊ぶのは、何度やっても面白いものです。自分たちでつくったコースで遊ぶのは、なおのこと楽しいでしょう。

本題材では、教室の黒板や壁面なども使って、ダイナミックな表現活動ができるようにしました。グループで協力して「ビー玉が転がるコースをつくる」という共通の目標に向かって、ビー玉がより面白い転がり方をするように、何度もつくり、つくり変えながら表現活動をすることをねらいとしました。

授業実践

授業前の準備

紙筒は、直径三・八cmのものを上下半分に切り、ハーフパイプ状にしたものを用意しました。大きめのカッターナイフや電動糸のこぎりを使用すると加工しやすいと思います。印刷機のマスターや、ラップ、トイ

レットペーパーなどの芯を集めておくようにしました。さらに、段ボールシート（両面・片面）も用意し、しかけ等の細かい表現もできるようにしました。

で紙筒のハーフパイプを留め、ビー玉が左右に転がりながら落ちてくる簡単なコースを提案しました。子どもたちからはすぐに、「やってみたい」という声が上ががり、カーブやジャンプするコースもできそうだと、活動の見通しをもつことができました。

導入時の提示

まず、黒板にマグネットクリップ

転がり方を「試し」ながら表す

次に、ビー玉が転がるコースを「試し」活動に取り組みました。ビー玉は少しの傾斜でもよく転がり、すぐにコースから飛び出してしまいます。この課題を解決しようと表現の工夫が見られました。

あるグループは、コース途中に扉を付けてブレーキがかかる仕組みを考え出しました。また、片面段ボール紙で段差を付けたリ、本棚を使ってコースを持ち上げたりして、何とか転がる速度を抑えようと工夫していました。

背面掲示板を活用したグループでは、段ボール紙の裏面に画鋲をテー





プで貼り、掲示板に固定できるようにしていました。ペットボトルや片面段ボール紙を貼り付け、クルクルと回りながら落ちて進んでいくコースを表現しました。

おわりに

活動の前半には、グループごとにビー玉を転がし、相互鑑賞する時間を設定しました。ビー玉がコース(筒)の中に隠れて見えなくても、転がったり落ちたりする音を真剣に聞いたり、一瞬だけ見えるビー玉の動きを目で追ったりしながら、楽しく鑑賞していました。

そして、最後にも、鑑賞の時間を設定し、コースの工夫や面白さを共有するとともに、学習を振り返ることができるようになりました。

「やったあ、すごい！」と歓声が挙がったり、うまく転がらなくても「もう一回やってみよう」と声をか

指導計画	
時間	4時間
領域	A表現(2)
材料	紙筒(直径3.8cm×150cm)、段ボールシート(両面・片面)、ペットボトル、ビー玉、マグネットクリップ、画紙、養生テープ、カッターナイフ、木工用接着剤など
学習目標	ビー玉が面白く転がるように、何度も試しながら、材料や用具を選んだり、表し方を工夫したりして、自分たちのビー玉コースターに表す
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●友人と協力しながら材料を組み合わせてビー玉が面白く転がるコースをつくる ●何度も試しながら、コースをつくりかえる
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ●ビー玉が面白く転がるように、何度も試しながら、自分たちのコースターに表そうとしている(造形への関心・意欲・態度) ●ビー玉が面白く転がるようなコースの仕組みやつなぎ方を思い付いている(発想や構想の能力) ●自分たちの思いに合ったコースターになるように、材料や用具を選んで使ったり、表し方を工夫したりしている(創造的な技能) ●自分たちや友人のコースターに関心をもち、よさや面白さを感じ取っている(鑑賞の能力)



け合ったりしながら、楽しさや喜びを感じる時間になったと思います。

授業実践

学びのフロンティア

中学校 2・3年生向き

「らくがき」からの発展

表現における思春期の危機を乗り越えるために

東京学芸大学附属竹早中学校 山田猛

はじめに

ローウェンフェルドやジョンストンらが、表現における「思春期の危機」*について警鐘を鳴らしてから半世紀以上になるものの、はたして今日、その状況が克服されているかは疑問が残るところです。両者に共通しているのは、その克服の手段として、再現描写への過度のこだわりからの解放を目指している点にあります。

本題材は、幼児の頃のスクリブル（ながりがき）に見られる原初的な欲求を大切にし、思うままにらくがきをさせつつ、簡単な形をもとに変化・発展させながら独自のフォルムへと発展させていくことを目指しています。

思春期に起こりがちな描写表現への自信の喪失を避けるために、スクリブルを導入することはジョンストンも推奨しているところです。生み出される形や色が、表現への喜びや自信につながり、それらすべてが自

分自身の無意識の中から立ち現れてくる、「創造の原点」ともいえる原初的な表現活動といえるでしょう。

手立てと子どもの学び

「今日らくがきをしてもらいます。ただし条件があります。『見たくない形』を生み出しましょう。『エーッ』の反応とともに、どんならくがきし始める生徒もいれば、いきなり描けない生徒には、はじめは簡単な○や△のような形からスタートさせ、それを少しずつ変化・発展させていくよう促します。途中過程をすべて残しておくことが大切です。生徒が生み出す様々な形を、教師はおもしろがりながら言葉がけをしていくと、彼らは手の動きがどんどんダイナミックに変化し夢中になっていきます。さらにいくつかを合体させたり、好きなところを選んで再構成させたりして形を練り上げさせていきます。その中から、主役や脇役、場合によっては背景になり

えるものを選ばせ、全体の構成を考へさせます。そこからは、生徒の興味関心や発達段階等に応じて、抽象画や文様デザイン、平面構成や切り絵等、様々な題材へと展開させていきます。

例えば「切り絵」の場合は、描いた線を切り抜き、裏から別の紙を貼ります。絵の具等での描写に自信が持てない生徒でも、らくがきの線がステンダグラスの枠のようなしつかりと力強い輪郭に置き換わり、表

現の喜びや自信へとつながる効果が期待できます。裏から貼るのが色画用紙だけでは色数が限られるため、画材は自由に、マーブリング、フロタージュ、カラージュ等の技法や、彩色・文様等の描き込みの工夫もさせると、さらに表現の幅が広がっていきます。

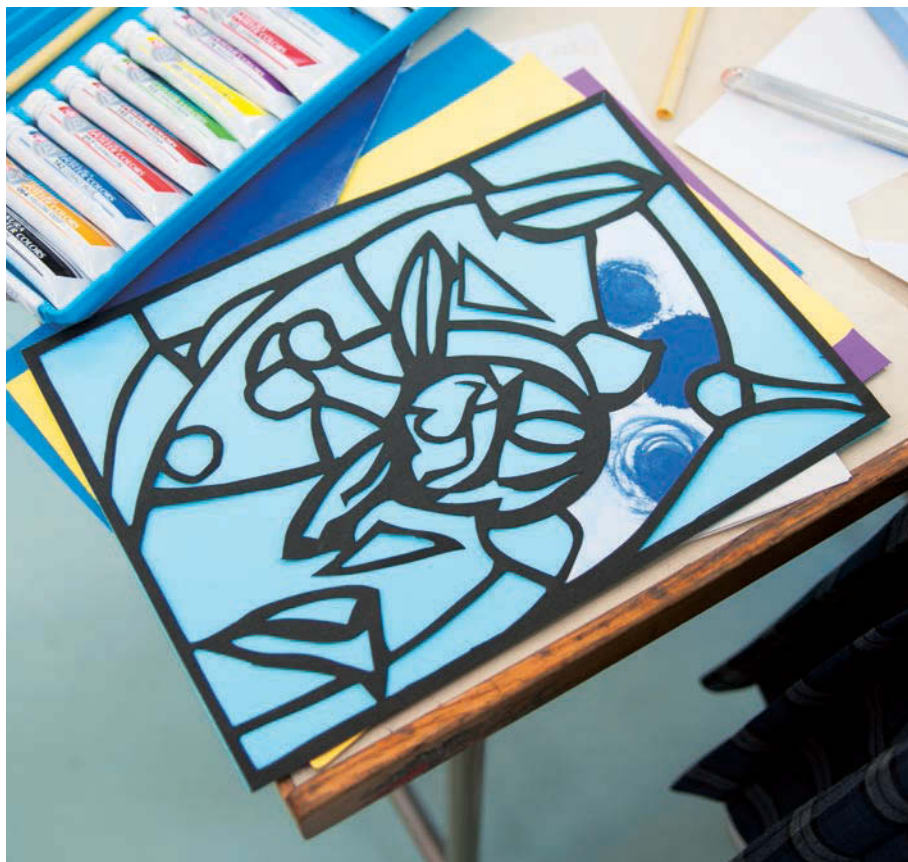
鑑賞活動では、形や色で表現された作品の印象を、味覚・聴覚等の五感を通したオノマトペに置き換えていき、それらをもとに独自の世界観



*思春期に目覚めた批判的意識によって、自分の子どもっぽい表現にショックを受け、表現活動の危機が訪れるとされる説。



切り絵にする展開では、
らくがきで生み出した形を
カッターで切り抜きます



単純な形からどんどん変化させていって、見たことのない形が生み出されました

絵の具を使って

指導計画	
時間	5～7時間
領域	A表現(1)(3) B鑑賞
材料・用具	画用紙、鉛筆、カッター、絵の具など
学習目標	らくがきにより生み出した独自のフォルムをもとに、創造的に世界観を表現し、鑑賞として感覚を通じた言葉に置き換えながら、言語による表現活動につなげる
主な学習内容	<ul style="list-style-type: none"> ●らくがきを発展させて独自のフォルムを創造する ●フォルムをもとに全体の構成を考え、自分なりの方法で独自の世界観を表現する ●作品の印象を、感覚を通じたオノマトペに置き換えたりしながら、言語活動へと発展させる
主な評価の観点	<ul style="list-style-type: none"> ●主体的に表現や鑑賞しようとしている(造形への関心・意欲・態度) ●らくがきから独自の形や色を構想している(発想や構想の能力) ●自分の表現意図にあう表現方法を工夫し、計画的、創造的に表現している(創造的な技能) ●形や色の印象を言語に置き換え表現している(鑑賞の能力)

言葉ではうまく表現できない思春期特有のモヤモヤとした思いを、形や色に置き換えていく事によりアートセラピー的効果も期待でき、「気持ちすがすっきりした」等の感想もよくあります。中には「降りてきた!」などの調子の良い言葉が聞こえることも……。

言葉ではうまく表現できない思春期特有のモヤモヤとした思いを、形や色に置き換えていく事によりアートセラピー的効果も期待でき、「気持ちすがすっきりした」等の感想もよくあります。中には「降りてきた!」などの調子の良い言葉が聞こえることも……。

授業を終えて

らくがきに集中してフォルムを創造する過程では、ある瞬間爆発的にアイデアがわき上がってきたり、1+1=2のように飛躍的にジャンプするような感覚を体感することも起こります。中には「降りてきた!」などの調子の良い言葉が聞こえることも……。



生まれた形に着色をしていく展開での生徒作品

や、絵本のような物語の一場面、詩や散文等を紡ぎ出す活動にも発展できます。発達段階によっては「ジョハリの窓」の理論を応用して、鑑賞を通じた新たな自分自身との出会いや、友人を違う視点で理解することにもつなげていく展開もあります。

く聞かれます。また、再現描写に自信を持ってない生徒でも、当初は予想していなかったような世界観が広がってくるおもしろさを体感することで、表現活動にのめり込んでいく場面が見受けられ、「思春期の危機」を乗り越えるための一つの手立てとなりえるのではと考えます。

鑑賞の形

久永一郎

大日本印刷株式会社
C&I事業部 コンサルティング本部 I M & S コンサルティング室室長

第1章

はじめに

私はこれから紹介するルーヴル・DNPミュージアムラボのプロジェクトマネージャーとして約八年参加してきました。開発者としてこれまで実施してきたことに加え、一生活者としてルーヴル美術館から学んだことや美術鑑賞の気付きについて紹介します。

ルーヴル

ーDNPミュージアムラボの紹介

ルーヴル・DNPミュージアムラボ(以下LDML)はルーヴル美術館とDNP(大日本印刷)との共同プロジェクトです。



©2009 Musée du Louvre / Ieoh Ming Pei / Stéphane Olivier

端緒は、DNPが一九九三年に発足した「美術館メディア研究会」に遡ります。この研究会では、学芸員や研究者、先生、記者といった、美術館と深い関わりを持つ人々と共に、「情報発信」や「アーカイブ」など、「これからの美術館」を考える上で重要な幾つかのビジョンを提起しました。そこでの問題意識を具体化する活動の一つが、二〇〇六年にスタートしたLDMLです。ルーヴルの所蔵品を東京・五反田の弊社ビルに移送し、マルチメディアを活用しながら作品を鑑賞する新しい美術体験のあり方を、十回の展覧会を通じて提示してきました。

ルーヴル美術館はなぜITを使いこなさなければならぬのか

このプロジェクトはルーヴル美術館前



第10回展示室 ©photo DNP

館長のアンリ・ロワレット氏の「二十一世紀もルーヴル美術館が世界のリーダーであり続けるためにはITを使いこなす必要がある」との思いから始まりました。「導入する」ではなく「使いこなす」というところにポイントがあります。その根底にはルーヴル美術館が考える「作品と人のよりよい関係を構築する」という考え方があります。

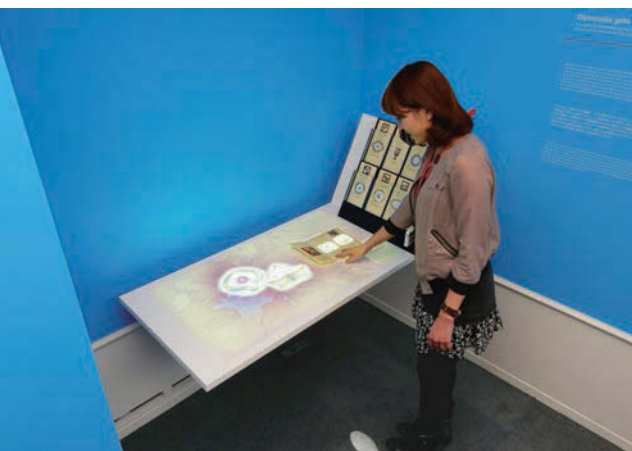
彼らの考え方は美術館という空間装置も、学芸員やギャラリートターのボランティアなどの人も、出版物やパンフレットといったツールも(今回対象となるマルチメディアも)全ては作品と人との関係をよりよくするための媒体(メディアアシオン)なのだそうです。各メディアアシオンにはそれぞれの役割と特徴があり、ルーヴル美術館はこれまでこのメディアアシオンを深く研究し様々なワー



DNP五反田ビル ©photo DNP

クシヨップやツールを開発してきました。しかし、ここ数年で一年間の来館者が一〇〇〇万人を超え、フランス語を母国語としない来館者の比率が上がり、美術鑑賞の場というよりは観光の一部と考える人が増えていること、フランスであつても若者の美術離れが進んでいること等課題が顕在化してきています。

解決策の一つとして、個人用の音声ガイドを導入してみたが、せっかく家族で来館しても解説を聞いた作品はばらばらでルーヴルに行った経験が共有されていないという新たな課題も発生していました。また、他の美術館でITが導入されているのを見かけるようになったが、どこか無機質でその場に似つかわしくないと感じることも多くありました。こういった問題に対して従来のメディアアシオンだけでは対応しきれない部分が出てき



第7回展で開発したマルチメディア ©photo DNP

ていると考えたようです。

当然、美術館の中にあつてはギャラリートゥアーやワークシヨップの方がわかりやすく鑑賞も深まるし、出版物やインターネットで学ぶ機会も格段に増えているわけですが、美術館という空間装置の物理的大きさの限界、来館前に持つてほしい美術への興味や知識、ワークシヨップの受け入れ人数の限界があり、新しい解決するメディアアシオン（＝マルチメディア）を再設計することが必要でした。

従つて、単体のマルチメディア導入を考えるのではなく、従来のメディアアシオンと連動し相互補完的に機能するように全体を設計すること。いきなり答えに到達できないことが予想され、様々なマルチメディアと既存メディアアシオンとの組み合わせを試行錯誤すること。これが「使



第9回展で開発したマルチメディア ©photo DNP

いこなす」という表現の真意でした。

一つの作品を深く掘り下げる
新しい展示スタイル

L D M Lは上記ルーヴル美術館の課題に解決策を見出すとともに、これからの美術鑑賞の考え方として、一度にたくさん作品をざっと見るのではなく、一つの作品をじっくりと鑑賞し様々な切り口から作品を考えるスタイルをとりました。これは美術鑑賞を通じて物事を多面的に評価する力がつくというルーヴル関係者の理想を形にしたといえますし、成熟社会の鑑賞方法、マルチメディアという新しいメディアアシオンの特徴を活かした手法と考えています。

つづく

第七回

関口光太郎

「自分の作品は、国宝かゴミか？ 判断できない。だから、芸術一本の作家を尊敬します。」
こう語る彫刻家の、もうひとつの顔は教員。
だが二足のワラジゆえ、「美術」への思いは純化する。
彼の作品は「教育」の後押しで、いま唯一無二の個性となる。



アーツ前橋での展示。トラック二台で運び込んだパーツを組み立てる。



大人魚姫
2013
[新聞紙、ガムテープ、木／高さ300cm、全長600cm]

土曜日にもかかわらず、町には人影がなかった。地方の旧市街地は、どこも閑散としている。住人の多くは、郊外の大型ショッピングモールでお金を落とす。それが平成の今だろう。でも、空洞化した場所を文化で活気づけようとする動きがないわけではない。ここ前橋も、廃業したデパートをリノベーションし、昨年美術施設が作られた。その真新しい搬入口で作家を待った。

運送業者のトラックから降りてきたのは、長身の青年。関口光太郎、前橋出身の彫刻家だ。駐車を待つ間、黒縁眼鏡をかけ静かに佇む姿は、どこか公務員を思わせる。でも、ジャージの下から現れたド派手なTシャツで印象が一変した。目一杯に描かれたビートルズ。繁華街のガード下でこっそり売られていそうな代物だ。第一印象が崩れた。

業者が、トラックからパーツを降ろしはじめた。展示フロアへと移動する巨大な頭部、上半身、腰、尻尾。それらを組むと、六メートル超の像

ができあがった。地面に両手を突っ伏し、今にも立ち上がろうとする人魚姫。これは新聞紙とガムテープから成る。

関口は、ずっとこの素材で彫刻を作ってきた。新聞をちぎっては丸め、ガムテープをちぎっては貼り、立体化していく。素材は違えど、反復する作業は、粘土を扱う過去の彫刻家たちのそれだ。いわば新聞紙彫刻。

小学三年生の時、絵画教室を営んでいた母親から教わった。最初に作ったのは、恐竜ステゴサウルス。

少年時代から、皆とスポーツをするよりは恐竜を徹底的に調べたり、一人で工作をしたりしていた。人生最大の影響を受けたのは、幼稚園の時に観た怪獣映画。子どもであれば、一番目立つビジュアルに目を奪われる。彼は、それ以上に怪獣が壊す町のジオラマや、スーツアクターといった裏方の仕事に惹かれた。すぐ両親に映画を特集した本を買ってもらい、隔々まで読んだ。もの作りの舞台裏

を知り満足する自分を発見した。プロレスも好きになった。レスラーが繰り出す技の美しさに感動するのはもちろん、実は試合には筋書きがあるのかもしれないと感じながらも楽しんだ。レスラーが本気で戦う瞬間を見逃さなかった。エンターテインメントの中に見え隠れする人間の生な営み。物事に多面性があることに面白みを感じた。

高校の時に造形したのは、十六文キックを放つ巨大なジャイアント馬場。でも、単純にプロレスラーを造形物にしたかったわけではなかった。そこには美術界への反発があった。当時は村上隆が注目されていた時期。コンセプト通りに図面を引き、外部に発注してできあがる表現。関口は、実際に手を動かしながらものを考え、形を作っていく。正反対だった。

何かに反発することで自分の存在を確認する。それを、もの作りのバネにしていた。美大で彫刻を専攻してから、規格から外れたものばかり

りを作った。例えば、『羽化』という習作。つなぎの服に表皮や羽根を造形し、それを着て、蛹から成虫になる過程をパフォーマンスで表現した。

「美術は一旦作品を置いたら、作者はそこにいなくてもいい。それって、やり逃げですよ。だから作品への批判も受けられない。批判を体で受け止めないのはずるいと思ったんです」。

美術は自分を表現できる最上の手段だが、作り手の主張を一方的に伝えることに違和感があった。だから、演者と観客が対話できる、パフォーマンスという表現に憧れた。敬愛するマイケル・ジャクソンはその最たるものだと考えた。マイケルは舞台上、観客の賞賛や批判を体で受け止め、瞬時に歌やダンスで応える。プロレスラーに感じた凄さもそれだった。

卒業が近付いていた。大学を出て、すぐに芸術家として名声を得られるわけではない。そもそも自分は作家を続けられるかどうか分からない。

美術って、すべての物事の着地点になるわけですよ。日常生活で嫌な思いをしても、それを作品作りに活かせばいい。美術というものがあれば。

だからこそ卒業制作に、自分にしかできない表現をぶち上げてみたいしかし、どうしても「主張」の問題が立ちはだかる。

彼はそれを解決するため、作品にある枷を科そうと考えた。自分の主張を聞いてもらう代わりに、見てくれた人たちを楽しませる……シンプルな仕掛けだった。そのためには、大きさ、数、密度、この三つの要素が必要だ。すべて揃えば、誰もが楽しんでくれる作品になる。子どもの頃からエンターテインメントに熱狂した自分だから分かる。

『瞬間寺院』。南アジアの寺院を想起させる巨大な門を作り、その表面に動物や植物から日常道具に至るまで、この世の森羅万象を無数に配した。寺院という永遠の象徴と、身近にあるハサミや靴に宿る刹那の美しさ。それを併置することで多面性のある作品ができた。人が驚くのを目の当たりにし、手応えを感じた。

だが、彼は作家専門の道には進まなかった。卒業後教員免許を取り、就職した。勤務先は、知的発達障がいの子どもたちが通う特別支援学校。「自分が教育に向いているかどうかなんて分からない。でも働くんだ」と、気持ちを切り替えた。いざ就業すると、案の定仕事で疲れ、気付くと朝になつてた。その繰り返し。

そんな中、『瞬間寺院』が雑誌に取り上げられたことで、高名なファッションデザイナーから新作の依頼が

きた。やはり美術には未練がある。沈みかけていた心を奮い立たせ、作った。だが続かなかった。夏休みにしか、まとまった時間がとれないからだ。

通勤途中、自転車に乗りながらも、無意識に美しい形を探さようになっていた。このまま手を動かさないと、自分はバランスを欠いてしまう。もう一度、本気で作るしかない。一念発起し、夏休み以外の時間もすべて制作にあて、二年がかりで新作を完成させた。その行動が、彼に岡本太郎現代芸術賞の最高賞を引き寄せた。

「美術って、すべての物事の着地点になるわけですよ。日常生活で嫌な思いをしても、それを作品作りに活かせばいい。すべての経験が無駄にならないんですよ、美術というのがあれば」。

彼は、これが「美術の効用」だという。就職して、美術と距離があった自分にも言い聞かせていた言葉なのだろう。作家とは、日常生活では解消できない澱のようなものを、自ずと溜め込んでしまう人間のことだ。内部に過剰に積もった澱は、も

のを作ることで吐き出される。そこには、作り手の「主張」があつて当然だろう。過去、彼はその部分に敏感に反応した。しかし、制作を諦めなかったのは、やはり外に向かつて自分を表現するんだという作り手としての「業（ごう）」が勝つたということだ。「美術の効用」を信じるか



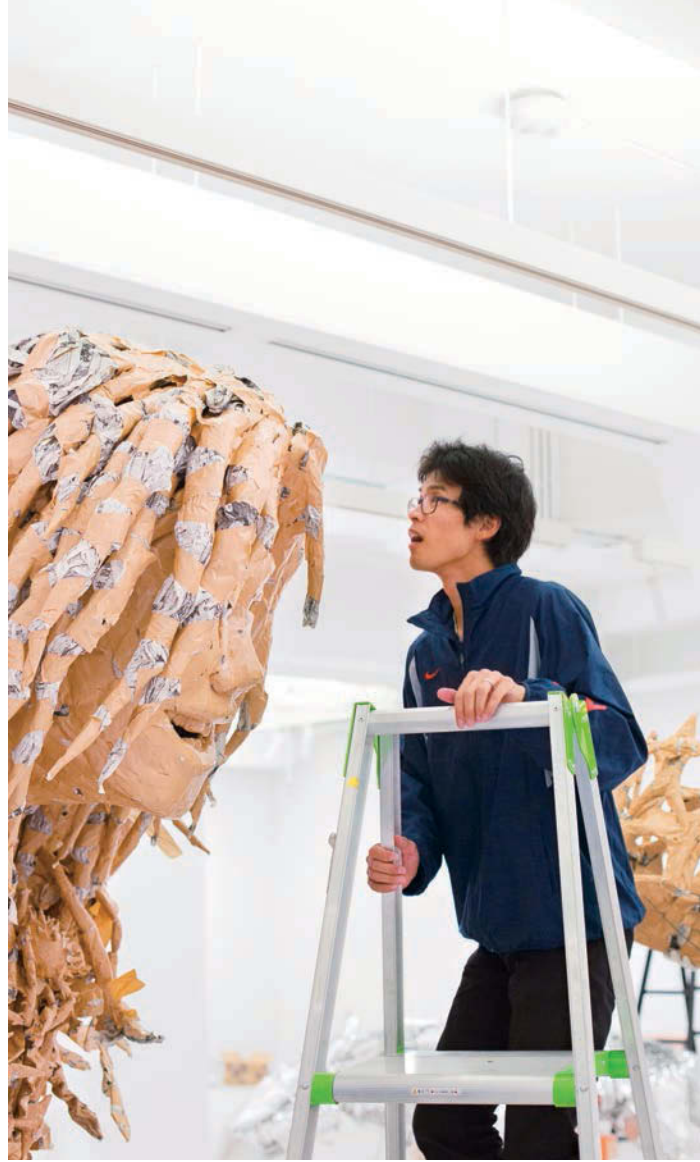
ただ、美術だけを信じていれば、日々の生活が乗り越えられるものでもない。彼も、美術自体に入れ込むことでがんじがらめになったり、家族が病を抱えるような時期を過ごした。それを救ってくれたのは、美術ではなく「仕事」の方だった。正直、教職を負担に感じた時もあったが、子どもたちと触れ合ううち、教育が美術以上に奥深い世界であると気付いた。子どもたちと時間を共有したことが、彼に新しい息を吹き込み、作家を続ける一助となった。

ここ数年、作家と教員を自然な形で両立でき始めた。外部から作家として講座を依頼された場合でも、教職の経験を活かすことができる。反対に、学校の授業では新聞紙とガムテープを教材にもできる。また美術と教育についても、一言持てるようになった。

特別支援学校の子どもたちにとって、美術の分野はその能力を活かせるジャンルのひとつであると感じる。そして、彼らの力は外部に向かってアピールできる強さもある。しかし、間違っではない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。



ステゴサウルス(小学3年生の時の工作)
1992
[新聞紙、ガムテープ、障子紙、水彩絵の具]



だからこそ、自分を肯定できたのだ。

テープを教材にもできる。また美術と教育についても、一言持てるようになった。

特別支援学校の子どもたちにとって、美術の分野はその能力を活かせるジャンルのひとつであると感じる。そして、彼らの力は外部に向かってアピールできる強さもある。しかし、間違っではない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。教育においての美術は学習活動であるわけではなく、間違ってはいけない。

彼が「主張」することをためらいながらも、作品を生み出した。卒業制作の寺院、その中心にあったのは、巨大な自分自身の顔だ。しかし、今回の人魚姫の顔は、学校の子どもたちを写したような柔和な表情だった。自分を表現するためには、世界のすべてを自分に引き寄せるしかないと考えていた若者は、十年後、自分以外の世界の広さを認め、それらを包摂するような作品を作った。

人間は、自分一人が好きだけでは満足しない。そこに、自分以外の人間が参加することで、本当の充足が得られる。自分に意固地になって他人を敬遠しては、そこから遠ざ

かっっていくだけだ。だから、まず他人の存在を自分の中に意識しながら、今の状態を変えていく努力をすることが必要なだろう。新しい何かを得ることは、自分を失うことではなくて、新しい自分を発見するということなのだから。

彼が教職に挑戦したことは、自分を変えるということにおいては、最大の転換点だったのではないのか。怪獣映画に影響を受けたり、岡本太郎賞を獲ったりしたこと以上に。作家は、ものを作ることでなくても変わることができる。それは、もちろん作家ではない私たちでもそうだ。

関口光太郎 せきぐちこうたろう
一九八三年、群馬県生まれ。幼少期より新聞紙とガムテープで立体を作り始める。多摩美大卒業後、特別支援学校に就職。教員を続けながら制作した「感性ネジ」で岡本太郎賞を受賞。全国でワークショップ等多数。

関口光太郎 せきぐちこうたろう
一九八三年、群馬県生まれ。幼少期より新聞紙とガムテープで立体を作り始める。多摩美大卒業後、特別支援学校に就職。教員を続けながら制作した「感性ネジ」で岡本太郎賞を受賞。全国でワークショップ等多数。

●ともに学ぶ

図工・美術の先生と子どもが、ともにつくりだす学びの日々。

●六匹のハムスターより 一匹のエアウサギ

当時担任していた三年生のクラスでハムスターを六匹飼うことになりました。そこで「わくわくハムスターランド」という題材を実践しました。段ボール箱の中にハムスターが楽しめる遊園地や部屋をつくるというものです。子どもは実際にハムスターを入れて試しながらつくりました。それを研修会で発表したところ「ハムスター地獄だ」など、先輩たちからはダメ出しの嵐でした。しかし、私は納得できませんでしたが数ヶ月が経ち、参加した合宿研修で聞いた先輩の実践で目から鱗が落ちることにあります。

その授業では、飼育小屋でウサギを観察していた子ども一人一人に、先生がウサギを渡すふりをします。すると子どもたちは大事そうにエアウサギを抱え教室に持ち帰り、机の上に置いてウサギの絵をかき始めたというのです。子どもはウサギの柔らかさや温もりをイメージで感じていたでしょう。

私たちはよかれと思い、ふんだんに材料や用具などを与えがちですが、実は

子どもから〈創造的な想像力〉という資質能力を発揮する機会を奪っているのかもしれない。年が近いから自分の方が子どもの気持ちに分かると子ども理解を勘違いしていた新卒二年目の頃の話です。

北海道札幌市立拓北小学校 湯浅大吾

●わたしの原点

二十年以上も昔、わたしが新米美術教師だった頃、ポスターカラーを使わず、色紙を貼って平面構成の制作をしました。時間短縮を狙った単なる思い付きの課題でした。

するとある生徒が色紙の限られた色彩を見事に使いこなし、輝くような美しい作品をつくりだしたのです。全く予想外でした。彼はそれまで目立つような作品はつくっていなかったからです。

そこで気付いたのです。その生徒は元々素晴らしい色彩感覚を持っていた。でも、色塗りが苦手で、わたしの指導も拙く、その力を引き出すことができなかつたのだと……。

それがわたしの授業の原点です。ど

ういう課題を設定し、どういう授業をすれば、子どもたちの素晴らしい才能や可能性を引き出せるのか、その事を常に考えるようになりました。小さな工夫で子どもたちの作品は大きく変わりました。わたしも嬉しかったし、子どもたちも喜んで、より一層熱心に美術に取り組んでくれました。

その積み重ねで今があります。自分が思っていた以上の作品を仕上げた時、子どもたちが見せてくれるちよつと自慢気な笑顔、その顔が見たくて、今も授業に小さな工夫を加え続けています。

鹿児島県鹿児島市立星峯中学校 内村祥

●木彫の盆から

教師になりたてのころ、家庭訪問先で木彫の盆でお茶を出されたことがありました。植物をデザインし、荒い彫りだが味わいのある盆でした。この盆のことを尋ねてみると、子どもが美術の授業でつくった作品でした。子どもの作品を生活の中で使い楽しんでいる、この家庭の心の豊かさに感心させられました。

以来、生活と結び付いた題材にこだわり指導してきました。葉をデザインしたコースター、自分で漉いた和紙を使ったランプシェード、アルミ缶を溶かしてつくったペーパーウエイトなど、身近に置いて永く使えるものを、材料にも配慮して制作させました。

今の世の中、簡単に便利なことが幅を利かせ、安価な商品や使い捨ての商品が生活の中に浸透しています。こうしたことから、ものを大切にする気持ちが薄れてきているように感じます。

このような世の中になつてきているからこそ、ものと向き合い、ひとと向き合う美術の指導をとおして、豊かな心を育ててほしいと思います。ものを大切に作る気持ちは、ひとを大切に作る気持ちにつながります。

群馬県桐生市立清流中学校 教頭 栗原健一

日本文のデジタル教材

見ることの喜びを感じて欲しい。そんな願いを込めて「みる美術」を開発しました。

デジタル機器の進化によって鑑賞を中心とした、様々な新しい授業の指導が提案されています。しかし、どんな時でも大切なのは、子どもと作品との「であい」ではないでしょうか。

感動的な「であい」を通してこそ、子どもたちは作品を見ることに喜びを感じ、楽しみを覚えます。より多くの作品に、より美しい画像でであうことができること、それがデジタル機器を使った鑑賞のよさだと考えました。

「みる美術」はシンプルなソフトです。主な機能は次



電子黒板に「みる美術」を映しての鑑賞授業。大画面に耐えうる、高精細画像です。

の三つ。作品を検索する「しらべる」、高精細な画像を拡大縮小できる「みる」、掲載作品は勿論、自分たちで撮ったデータも取り込んで比較することができる「くらべる」。シンプルで使いやすいからこそ、先生のねらいや、子どもたちの様子にあわせて自由な使い方ができ、作品との「であい」、鑑賞の「深まり」と「広がり」をより豊かなものにすることができます。大きな画面で映すこともできるので、子どもたちの話し合いや、説明にも活用できます。

日本文のサイトでは、「みる美術」を使った実践事例もご紹介しております。是非、ご覧ください。



日本美術 名品コレクション編、西洋美術 フランス国立美術館連合編
各編価格（校内フリーライセンス用）60,000円＋税
※2商品同時注文の場合、価格は100,000円＋税になります。
・校内フリーライセンス：1校（1機関）の同一施設内に設置・所有されているコンピュータに限り、無制限で使用できます。
・本体DVD-ROMには作品解説PDFデータも収録しています。

みる美術の収録作品・作家リスト、
実践事例は日本文 Web サイトをご覧ください。

日本文

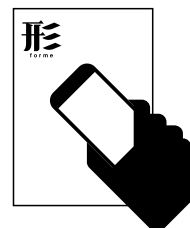
検索

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる！

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを立ち上げます。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 該当ページにかざすと動画がはじまります。



カザスマート





中学校1年
[美術1]P.7掲載

児童・生徒作品 私の見方

窓いっぱいには並ぶステンドグラス風の作品。個々の作品が響き合い全体として光のハーモニーを奏でていきます。それ以上に目を見張らせるのは、床に落ちてひろがる透過光が乱舞する光と色彩の饗宴です。まるで西欧ゴシック大聖堂のステンドグラスの、堂内に満ちあふれる光と色彩を思わせるかのように幻想的です。指をさして光の効果を確認する生徒、手をかざして色光をすくい取ろうとする生徒、黙して見とれる生徒、それぞれの生徒たちの感動がじかに伝わってきます。

平成十年の学習指導要領で「光」が初めて取り上げられ、現行のものにおいても共通事項に「光の性質やそれをもたらす感情の理解」(要約)と明記されています。生命の源である太陽の光は古代の人々から崇められてきました。人工光であるLEDなどが普及した今日においても、光のもつ美しさや表現力は私たちを魅了して止みません。

生徒たちは、これからも光に関心をもち続け、できれば光の演出に再挑戦したいと思っているのではないのでしょうか。みなさんはどう感じますか？

文 京都嵯峨芸術大学 教授 細谷僚

形 forme No.304-2014

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成26年(2014年)9月1日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: Takehiro Goto

Design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

CD33245

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690